

Pat Goldman-Rakic の言葉から

小嶋祥三

『留学記 2』に書いたが、わたしは米国 NIH に留学したが、Pat Goldman が受け入れてくれた。Pat はその後 Yale 大学へ移り、P. Rakic と結婚して、Pat Goldman-Rakic になった（移動と結婚の順番は定かでない）。船橋新太郎さんは Yale の Pat の研究室に留学した。そして、素晴らしい数編の論文を書いて、日本に戻り、京都大学に奉職した。以下は船橋さんの京大定年退官の会で本人から聞いた話である。そこからアレコレ考えたので記す。

ある時、船橋さんは Pat に Georgopoulos の population vector の考えを前頭前野に適用する実験を提案した。しかし Pat は賛成せず、そんな実験をしても Georgopoulos を喜ばせるだけだ、と答えたという。最前線を走る研究者の意地、意気込みが感じられる言葉だ。二木先生も似たようなことを言っていたのを思い出した。われわれは欧米の研究者を持ち上げる傾向があるが、そんなことをしても、その研究者が喜ぶだけだ、と。確かに、もうそういう時代は終わりにしなければいけない。われわれは世界の研究者が注目するような事実や理論を提出しなければならない。

わたしは研究所勤務が長かった。研究所の教員にとって重要なのは、自らの新しい実験結果だった。実験にしても、理論にしても、他者の二番煎じは価値が低かった。世界の研究者の研究や動向を知っていることは重要だが、それだけでは評価されなかった。逆に、学部の先生はある程度評価の定まったこれまでの世界の研究成果を学生に伝える必要がある。しかし、それだけに埋没してはいけないだろう。わたしは研究生生活の最後を慶応義塾大学文学部で過ごした。それは幅広い知識を身に着ける機会になった。研究所と学部の両方に籍を置くことができたが、よい経験をしたと思っている。